

### 附属学校と大学の連携と顔のみえる関係

教育システム研究開発センター員 甲斐健人（文学部人間科学科）

「体育の人間は調査に向いている。」大学院生の頃、指導教員たちからきかされた言葉である。真偽はともかく、この言葉が右も左も分からぬ当時の私を励ましてくれたことは間違えない。とはいえ、何が調査向きなのか深く考えることもなく、体力があることや、他人と一緒にいることに比較的なれていることなどが役に立つのだろうか、などとぼんやりと思っていた。

奈良女子大学に来て7年になる。学生はよく「人の役に立ちたい」と口にする。どういうことかとさらに聞いてみると、「役に立ちたい」理由は、他人に喜んでもらうことで自分が「満足感を得たい」ためだという者が少なくない。そういう彼女たちの行動は傍らからみれば自己満足ではないかと思えることもあった。地域貢献事業などでたまに出くわすのだが、自分では良かれと思ってやっていることが地域住民にとってはあまり意味をもたず、むしろ丁寧につきあってもらっているような場合である。よくよく振り返ってみると、自分自身もそうだったかもしれない。残念ながら、多くの人とかかわる中で穴があったら入りたくなるような場面も少なくないのである。

3年前、文学部のカリキュラムが変更になり、スポーツ科学領域では全体の科目数を縮小しつつも「地域連携運動実習」を新設した。あえてこの科目を立ち上げたのは、机上で学んだことを、実際に、学外の方々を対象にした身体活動を提案し、実施したうえで、対象者にとっての意味を考察する必要を感じたからである。この授業の狙いの一つに「他者とどのようにかかわるか」という課題があることはいうまでもない。

今年度の地域連携運動実習は附属中等教育学校が活動場所である飛鳥地区バスケットボール教室を対象に現在

進行中である。受講学生たちが大学で検討した2回分のプログラムを同教室で実施した後に、改めて検証を行う予定である。先日、教室を運営する附属中等教育学校の二田貴広先生を大学にお招きし、教室の目的や活動等についてお話していただいた。

二田先生は、休日など体育館の空き時間を利用し、地域の児童に楽しく身体を動かす機会を提供している。安全面の配慮以外は、ほとんど叱ることもせず、バスケットボールとは異なる活動も多いという。「どこまでバスケットを教えようか、が今の悩み」と、子どもを上達させたいという「指導者」として湧き上がってくる気持ちと、地域に「ゆるめ」の場が存在する意義を大切に思う気持ちとの葛藤を率直に語っておられた。「子どもたちにとって何が大切なのか」という視点を変えることなく、ご自分の見解や悩みを語り学生と意見交換する姿には、地に足がついたおだやかさが漂っていた。

附属学校と大学の連携が課題とされている。いろいろな連携の仕方があるだろうが、当事者間の「この人たちと一緒に何かをしたい」という気持ちが重要なのではないかと気づいた。学内外の方とゆっくり過ごす時間をもつことが難しい昨今ではあるが、誰とどのように関わるのか、学生だけでなく私たちにも重要な問いなのではないだろうか。

やや唐突に冒頭の言葉を紹介したのは、その真偽を明らかにすることが目的ではなかった。もちろん自分が調査に向いているかどうかを論じるためでもない。拙文をしたためながら、心細い気持ちを抑えつけながら調査地に向かわせた「この人たちの生き様を知ってもらいたい」という初心を思い出していた。

## 幼小一貫教育において

### 「読解と表現を〈つなぐ〉論理的思考力」を育成する教育課程の研究開発

教育システム研究開発センター員 大野 智子（附属小学校）

平成21年度から3年間、文部科学省より指定を受けている附属幼稚園と小学校の研究開発も、2年目を迎えている。

一年次の活動を受け、以下のような研究計画を立てた。

#### (1) 幼小9年間の「読解－思考－表現」を〈つなぐ〉 新たなカリキュラム編成の実践

- ・初等教育前期・中期・後期に実施した内容を検討し、新たなカリキュラムを編成する。また、編成したカリキュラムに基づき二年次の実践を検討する。
- ・「ひらめき」の時間の学習において、論理的思考力を育むための指導の要点を明らかにし、発達段階的成長の系統性の究明に取り組む。
- ・異年齢の子どもによる多様な少人数の学習集団の構成や、幼小教師のTTなどの活動を行い、幼小一貫教育における活動内容を明らかにする。
- ・初等教育中期において、幼稚園教育と小学校の教科との内容的なつながりを検討する。

#### (2) 「ひらめき」の時間のカリキュラムと、各教科、 幼稚園5領域との関連および有機的相互関係について、 一年次に実施した領域を拡大し引き続き検討を行う。

#### (3) 評価の開発

- ・子どもの読解と表現を〈つなぐ〉論理的思考力の進展について、「独自学習」「相互学習」における論理的思考力の評価指標を作成する。

それを受け、それぞれのWGで活動してきたことを、7月5日に行われた第一回運営指導委員会で報告した。

#### 【幼小一貫教育WG】

- ・仮説1～4とWGの関連
- ・実践報告 なかよしひろば①  
初等中期（5～7歳）の異年齢交流



- ・分析と評価
- ・研究のこれから

#### 【カリキュラムデザインWG】

- ・論理的思考力を育む幼小一貫カリキュラムの作成
  - a) 読解と表現を〈つなぐ〉論理的思考力
  - b) 学習場「奈良」の活用、特徴的な行為
  - c) めざす子どもの姿、指導の手立てや工夫
  - d) 評価の観点、事例
 という項目に分け、初等教育前期と初等教育中期のカリキュラム表を作成
- ・今後の取り組み

#### 【実践開発WG】

- ・それぞれの学習領域で育まれている思考が、どのように「ひらめき」の時間に位置付いていくのか。（具体的事例を通して）
- ・「ひらめき」の時間に育もうとした論理的思考力が、他の学習領域で育まれてきた論理的思考とどのように関連しているのかの分析
- ・今後の取り組み

その時のご指導を受け、今後の方針、並びに、11月12日に行われる公開研究会の計画を立てた。

#### 【幼小一貫教育WG】

- 異年齢交流活動・幼小教師のTT指導の「なかよしひろば」では、どのように論理的思考力が位置づいているか、実践を通して整理していく。（文化の伝承、論理の働きなどを児童の作品、作文、親のアンケート、ビデオ等から、分析・検討する）
- 少人数クラスの活動、その他の取り組みも行う。

#### 【カリキュラムデザインWG】

- カリキュラムの表を整理統合して完成させる。

#### 【実践開発WG】

- 「ひらめき」の活動・時間における論理的思考力を分類整理し、具体的な事例として紹介する。

11月12日（金）公開研究会

- ① 公開保育・公開学習
- ② 分科会
  - A 子どもの思考を育む幼小一貫のあり方
  - B 「ひらめき」の時間のカリキュラム
  - C 「ひらめき」の時間にかかわる論理的思考力
- ③ 講演 神長 美津子先生（東京成徳大学教授）

## 附属小学校 平成22年度「学習研究集会」の様相

### テーマ「自律的に学ぶ子どもを育てる学習法～子どもが自ら進める学習とは～」

教育システム研究開発センター員 大野木位行（附属小学校）

今年度の附属小学校「学習研究集会」は、テーマを「自律的に学ぶ子どもを育てる学習法～子どもが自ら進める学習とは～」とし、今年度改めて「奈良の学習法」（以下「学習法」と称す）の根本・原点を問い直す機会を設けた。併せて、附属小学校の基幹的な学習活動である「朝の会」「終わりの会」「独自学習・相互学習・独自学習」「めあて」「おたずね」「ふりかえり」という一連の事柄を「学習研究」誌各巻を通じて考えていき、各教諭が「学習法」に対してどのような位置に立って学習指導に取り組んでいるのかを見直すことも進めている。

これらの中心的活動は、いずれも子どもが自らの学習を自律的に進めていくための重要な基礎を培うためのものであるが、「学習研究集会」や来年2月にまつ「学習研究発表会」は、これらの効果を総合的に検証する場として重要な意味をもつ。

ニューズレターの本文では、6月の「学習研究集会」当日の各分科会報告から、それぞれの協議の様相を伝えたい。

#### □低学年分科会

##### 「生活の気づきを表現する子どもの育ち」

はじめに、それぞれの学級で、子どもが生活の中での気づきを子どもがどのように表現しているかを発表した。1年生が気づいたこと、見つけたことをまとめている「はてなノート」の話から、日頃どのように子どもが疑問を見つけ、解決していくのかなどを紹介した。

協議では、1年生組西下教諭の公開学習のふり返りを行い、入学から2ヶ月で子どもがどのように育ってきたかを発表した。入学時よりも語彙が増え、内容が詳しく発表できるようになってきた。また、元気しらべて、見つけたことを発表する、自分の言葉で語る、友達のよさを見つける、の三点を大事にしていると紹介した。

1年生組の子どもの反応は素直で、お互いを聞き合う姿勢が出来ている。自分が発表することで発表している者の気持ちを理解できる。それが聞く人を思いやり、聞く姿勢がよくなることにつながる。

会場から、「聞き合いや話し合いをするときに投げっぱなしになりがち。高学年ならメモをとらせることが出来るが低学年でもやっているのか」とおたずねを頂いた。本校では学習は聞くことだけでなく、書くことも考えることにつながり、それが学習になる事を子どもに実感させる学習をしていると紹介した。

子どもには本来伸びる力がある、とは木下竹次の言葉

葉であるが、生活の中で様々なことに気づき、それを表現することで、子どもはのびてゆくものだと感じた。

※

子どもの気づきを子どもどうしの中で交流し、その学習への発展や気づきの広がり・深まりをまつことは、学習が子どもの生活という文脈から立ち上がっていくことにつながっていくという点で興味深い。同時に、子どもが友達の生活に共感しながら、友達の気づきに学ぶことで、情報を「血の通わない単なるデータ」としてではなく、「生身の人間の身の上で起こった出来事」として捉えられるようになっていく点は、子どもにとって生きた学びの基礎になっていくものとして重要だ。



気づきの聞き合いを楽しむ子どもたち（2年生）

#### □中学年分科会

##### 「自律的に学ぶ姿のとらえ方と活かし方」

本分科会では、4年生組西田教諭が代表授業を行い、担当の五名がそれぞれの教科や立場から日々の取り組みをお伝えした。国語科では、日々のけいこの中で、①ノートの書き方指導、②ことばに着目した「独自学習」、③「独自学習」から「相互学習」、④もう一度「独自学習」、を繰り返しながら、自律的に学ぶ子どもを育てていること。体育科では、運動会などの体育的行事を子どもの願いが強く現れる場として大切にしていること。しごとでは、「問い」を明確にもち、解決にむけた「計画・実施・反省」に取り組めるように、そして、「生活者としての視点」を生かしていくこと。食の学習では、給食時の放送原稿を担当の子どもが書き、調べたり発表したりする場があることが、さらに自らの食生活へ目を向ける機会をつくることになっている。また、「学習法」と最近教育界にも浸透しつつあるコーチングとの共通点も非常に多くある。

話し合いでは、自律的な学習を進めるのは子どもであるが、その学習を深めていくためには、子どもが言語化したものをどうとらえるか、また、発問、板書など教師のはたらきのあり方が大切であるという意見をいただいた。相互学習が進んでいる途中での教師の出方は、教師の解釈を押し付けるものではなく、子どもの思いやより深い考えを明確にできるような出方であることが大切であり、それが即ち、自律的な学習であるという意見もいただいた。

参会の先生方からたくさんのご意見を頂戴し、中身の深い分科会になった。

‡

子ども自身が自らの力で、つまり自律的に学びを深められるようにするには、教師が子どもの経験や思慮の不足を埋める配慮が必要だろう。子どもの考えには見るべきものが多くあるが、学習活動での教師が「子どもの思いやより深い考えを明確にできるような」関わり方をすることで、子どもは自分の考えの価値を知り、自信をもって自らの考えを拠りどころとして、いっそう深く広い見地に立つことができるだろう。

そのことを待たずして、教師が主導的に内容を次々と子どもに投げかけるようにすることは、学びの喜びを子どもから奪うことになりかねない。学童期の子どもにとってとはとりわけ大切な問題だ。

#### □高学年分科会

##### 「自ら進める学習を深める子どもの育ち」

本分科会では、子どもたちが進める学習の中で、さらに自らの学習を深めていく子どもたちの姿についての話し合いが行われた。

まず、5年星組の公開学習をとおして、子どもたちがすすめる算数の学習の進め方について話しあった。畔柳教諭からは、算数では、これまでに学習した内容と比べることで、子どもたちは自分の力で手がかりをみつけ、学習を進めることができるという説明があった。

後半では、考えどころに迫る問いを、どのように作っ

ていくかについて協議が行われた。一人一人の興味が違う中で、全体の問いにしていくにはという質問については、低学年では全体で本質に迫るのは難しい。しかし、高学年になってくると、空間・生活から問いを持ち、学んだことを総合的につなげられるので議論が深まるという話があった。

また、教師からの問いかけに子どもたちが乗っていくこともある。くじける場面では、教師や身近な友だちの働きが大切だなどという意見も出された。

‡

「学習法」をつくる過程においては自律的な学習を可能にする手立てがある。そのポイントを子どもがつかむことができるように子どもと関わることで、子どもが自分で進められる学習の有り方を子ども自身が探り当てることができるだろう。分科会報告にあった「これまでに学習した内容と比べることで、子どもたちは自分の力で手がかりをみつけ」という一文は、その一つだ。要は、子ども自らが既習内容に戻ってみようとする意志をもてるかという点だが、既習内容にもどって学習を構築し直すという絶えざる営みの中で、自力解決の道とそのため意志を自分のものとしていくのだ。

分科会報告にあった様々な子どもの学びの姿は、冒頭列挙した「朝の会」「終わりの会」「独自学習 - 相互学習 - 独自学習」「めあて」「おたずね」「ふりかえり」などを介して見られた子どものよさの一面だ。日常、あるいは、公開研究会の教室には、それぞれの子どもの自らの学びを喜ぶ姿があり、友達から大いに刺激を受けて明日の学びにつなげようとする子どもの姿がある。来年の2月には「学習研究発表会」が催されるが、6月の学びがどのように広がり深まったのかが検証される機会として、附属小学校教諭は早、気持ちが引き締まる思いだ。いずれ、また、本誌上でその模様を紹介できることと思うが、「発表会」に向けて、日々の弛まぬ研鑽を持続していきたい。



相互学習の様相（4年生 けいこ国語）

奈良女子大学  
教育システム研究開発センター  
Newsletter 13

2010年11月発行

奈良女子大学教育システム研究開発センター

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学 コラボレーションセンター204

TEL. 0742-20-3352

Web <http://www.crades.nara-wu.ac.jp/>

mail [crades@cc.nara-wu.ac.jp](mailto:crades@cc.nara-wu.ac.jp)